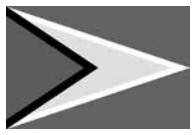


# 33カ国リレー通信



ガイアナ共和国  
Republic of Guyana

## 南米最後の秘境？ ガイアナ共和国

大橋 知加

民放テレビ番組で「日本人が99%行かないかも知れない国、南米最後の秘境」として取り上げられたことがあるガイアナ共和国だが、果たしてこの国が世界地図上どの大陸にあるのかわかる人はどれくらいいるのだろうか。この国は近隣諸国と比較すると一見知られていない。広域にわたるアマゾン川流域に広大な手付かずの熱帯雨林とサバンナ、珍しい動植物が多数存在するこの国を、秘境の地と考える人もいると思う。

今年、あまり国際ニュースにも登場しないこの国がNY TimesやBBCニュースのトップ記事を飾った。ガイアナ沖合での「ExxonMobilによる大規模油田の発見」である。これは、この国を“世界レベルでは微々たる農業生産物の輸出国”から“世界で数本の指に入る石油輸出国”へと変えるほどの発見であると言われている。ガイアナ政府の発表では同油田の埋蔵量は石油換算すると7億BBLを超えるとされており、一部の予測ではガイアナの国民総生産（GDP）を現在の12倍<sup>1</sup>まで引き上げることになる<sup>2</sup>と見られている。これは現在の石油価格で、およそ400億ドルに相当する。この大規模油田の発見だけを見ても、近年中に発展の可能性が高い国という視点からみ

ると興味深い国と言えるかもしれない。

### ガイアナ国民の特徴

この国の歴史は1966年にイギリスから独立して以降、49年とまだ独立後の日が浅く、国の指導者はラテンアメリカでは珍しいインド系であった。しかし、今年5月の油田発表が行われた頃にガイアナ国内でも政治的に大きな動きがあった。政権が23年ぶりに変わり新与党では大統領がアフロ系、首相がインド系と、新政権とともに国が新たな局面と発展を見せようとしている。

ガイアナ国民の特徴は、約6つの民族が入り混じる多民族国家国民という点である。44%<sup>3</sup>がインド系であり、ガイアナ料理というガイアナ風にアレンジされたカレーとロティがでてくるほどインド文化がこの国に影響している。また、オランダ、イギリスの植民地時代に、アフリカからつれてこられた奴隷の子孫であるアフロ系が30%を占め、その他カリブ系（いわゆる混血）が約17%、その他先住民が9%、1%が中国系、ヨーロッパ系と多民族が入り混じった国である。

### 秘境？ 内陸部

この国の内陸部だけを見ると確かに秘境と言えるかもしれない。ガイアナ共和国は日本の国土のおよそ57%<sup>4</sup>の面積を持つが、国土の大半（77%<sup>5</sup>）が森林で覆われており、人口は約80万人<sup>6</sup>と少ない。国の北部にあたる沿岸部に人口の90%<sup>7</sup>以上が集中しており、内陸部での人口は少ない上に点在している。

内陸部に住居を構えるのは、先に挙げた人口9%を占めるAmerindianと呼ばれる先住民民族が主で、その他は金やボーキサイト採掘のために出稼ぎに来ている沿岸部の住民か中国人、周辺国の者達がほとんどだ。先住民の村々まで行くには、道が整備されていないためボートでアマゾン川を上るか、小型セスナに乗って内陸部に入りそこから川か舗装されていない道に行くかのどちらかになる。

開発の観点から内陸部の村々を見ると、南アジアやアフリカ大陸では電気より携帯電話の普及の方が早い<sup>8</sup>が、この国は奥地の人口の少なさや先に述べた交通状況<sup>8</sup>の悪さも重なり携帯電話の普及率がかなり低い。私が訪れた村では、首都ジョージタウンから車で1時間、ボートで1時間ぐらいの比較



的に近い村であっても、電波がまったく入らない村や村の一箇所に電波が入る場所があり、1つの携帯電話を木にくくり付けて住民が共同で使用していた。もちろん電気整備は遅れており、基礎生活分野の普及・拡大も今後の課題である。

基礎生活分野の課題点に加え、内陸部の特に先住民コミュニティの脆弱性を度重なる洪水と早魃の影響が引き上げている。沿岸部と異なり内陸部での農業は焼畑耕作での自己消費が主であり、余剰作物をコミュニティ内や近くの村で売ることがほとんどだが、頻繁に起こる災害の影響で農作物が思うように取れず、必然的に食料の安全性や収入の安定性が確保できない上、土地の所有権問題、金の採掘から生じる環境汚染、若い世代の村離れ等が問題になっている。

### 秘境？ 沿岸部

一方、沿岸部では、90%の人口が集中することからも、経済と市場の拠点がほぼ集中している。この国の3大産業は農業、漁業、鉱業である<sup>9</sup>が、農業と漁業に関しては、一部の内陸部の零細農業や漁業を除けば、輸出入、国内消費用の漁獲量はほぼすべて沿岸部で

水揚げされており、輸出用に栽培されるサトウキビ（砂糖、ラム酒）、コメ、国内消費される野菜等の作物も沿岸部で栽培されている。沿岸部の幹線道路はほぼ舗装されつつあり、水も豊富なことから農業灌漑が整備され、野菜もトレンチや小川の岸を利用して栽培されている。トラクタ等の農業機械も沿岸部の農業地帯ではよく見かけ、内陸部に比べると秘境という感じは全くしない。

漁業においても、「零細」と分類される規模の漁業もモーターが付き、水揚げした漁獲物を直ぐに冷凍できるように船に氷が積み込まれている。筆者が訪れた組合では、組合としての運営や製氷機、漁船等の管理に関して、組合が自立して持続できる組織として成り立っていた。驚くことにこの漁業組合は適切な資源管理のため、これまでの漁業から持続可能で科学的情報を基にした漁業に転換したいと言う。農業省は近年中に漁獲可能量を定めることを考えており、GPSの導入などに協力的だ。

先日、以前実施された持続型農業研修のモニタリングのため参加した農家数件を訪れた。彼らはワークショップで得た情報と試験

的に支給された農業用遮光ネットとシート等の材料を基にシェードハウスを建て、それぞれ思うものを栽培していた。1人の女性農家はレタスやチンゲン菜を栽培していた。聞くと彼女の家ではレタスもチンゲン菜も食べないが、中国人によく売れ、単価が高いため栽培している、さらに通常の畑で作るよりも1週間早く収穫できるためシェードハウスを活用していると話していた。

これは、この農家はアグリビジネスの概念を理解し、収穫量や時期、市場調査を分析した上で作物を栽培し販売している、ということになる。現在は最近他の研修で学んだアクアポニックを実践しているとのこと。彼女は初等教育修了者であるが、少しのインプット（研修）でより大きなアウトプット（シェードハウス管理能力、効率的



写真1 先住民の村まで小型ボートでの移動（筆者撮影）



写真2 シェードハウス（筆者撮影）

な作物生産、アグリビジネスへの発展)を成果として挙げたことになる。これは一例だが国民の能力が沿岸部を發展させている一因ではないのだろうか。

だが内陸部と同様、沿岸部でも食料生産の安定性、農家の収入の安定は災害によって頻繁に脅かされている。この国にはニュースで人目を引くようなハリケーンや津波、大地震といった災害が無いので注目を浴びないが、沿岸部、内陸部にかかわらず、水害、旱魃が確実に国民に被害を与えている。

毎年、特に雨季には沿岸部が浸水し多大な被害を及ぼす。国連国際防災戦略事務局によると、ガイアナは洪水リスクランキングで162国中13位に位置する。古い下水設備や流水施設、灌漑設備に加え、沿岸部の多くは海拔0メートル以下に土地があることから満潮時に大雨が1、2日降ると直ぐに建物、公共施設、農地が浸水してしまう。2005年におきた大洪水ではおよそ465億米ドルもの損害が出た<sup>10</sup>。

国による災害に特化した具体的な対策が施されないまま、農業地帯である沿岸部では旱魃にも悩まされており、作物は旱魃と洪水によって毎農期ごとに被害が出る<sup>11</sup>。各地でこれらの災害が農民を農業から金採掘に押し出しているのも着目しなければならない点である。例えば首都から北西に位置するボメロン川沿岸の農業地帯では度重なる農地の浸水によって農作物による確実な収入が見込めないことから、金の採掘に奥地に出稼ぎにいくケースが多い。近年、金の価値の低下によって採掘で破産してしまった元農民が農業に戻るケースもあるが、長年使われていなかっ

た土地を農地に変えることは相当な労力と資金がかかり、せつかく手に入れた土地を手放してしまうケースも多い。

災害対策や防災に関する動きはまだ新しく、現在では農業分野において防災のメインストーリーミングに政府が動き始めており、2013年にはFAOと、2013年から18年までの農業分野における防災戦略を作成した。しかしながら、国家レベルの方針や対策があるにもかかわらず、各省庁での防災に対する予算は予算計画に含まれておらず、ドナー任せになっているのが現状である。

事実この国が重要視している直近の問題は、現在のドナー国による二国間協力や国際機関による支援が着実に減少していくことであり、政府の発言どおり5年以内に油田の生産が始まるとすると、早かれ遅かれ中所得国の一員になることから、現在の援助に頼るばかりの開発はさらに難しくなる。これをどう打破するかが新政府の大きな課題の1つだと言える。

### 秘境？ ガイアナ共和国

ガイアナの内陸部は確かに秘境と呼ばれる要素を多く持ち合わせている。だがそれ以外にもこの国が有するアセットは大きい。豊富な水資源や天然資源、広大な森林面積に加え、新政府の誕生や油田の発見、国民個人の能力を考えると、この国は脆弱性を軽減し、持続的な発展を促すのに必要な基礎的なアセットを持ち、少量のインプットで国を改善、強化できる力を持ち合わせていると言えるのではないだろうか。

ラテンアメリカでも目立たないガイアナだが、新政権がこれらの

アセットを如何に活かし、この国をどの様に發展させていくのか。今後、秘境と呼ばれるこの国がどう変化していくのか、ガイアナ国民また周辺国を含め、私たち日本人にも着目して頂きたい。

(本稿は、すべて筆者自身の観点に基づくものであり、国連開発計画の見解を示すものではありません。)

(おおはし ちか 国連開発計画 (UNDP) プログラムアナリスト)

- 1 世界銀行の発表ではガイアナの昨年のGDPは32億3,000万ドル
- 2 Bloombergによる
- 3 外務省による
- 4 214,969km<sup>2</sup>
- 5 World Bank 2015
- 6 UN 2013
- 7 外務省による
- 8 内陸へはアマゾン流域を船での移動が主
- 9 その他、林業も盛んである
- 10 Civil Defense Commission 2013
- 11 個人、またコミュニティレベルでの農業における対策や関心は個々見受けられる